



農村伝道の原点

校長 ロバート・ウイットマー

一〇月二〇日に神学校の「農伝デー・オープンキャンパス」のイベントがあり、百数十人がにぎやかでまた豊かな交流とつながりの時を持つことができた。沖縄と北海道から、そして手作りの美味しいものやレシピの本、葉書等々様々なグッズが売られた。その中で私は「農伝の七〇周年 農村伝道の原点」について講演を頼まれたが、何を語ったらいいかと思いつながら七〇年前に初代校長だったカナダ合同教会のストーン宣教師のクリスチャンの生き方と農村伝道についての言葉を新堀邦司さんがストーン宣教師について書いた「海のレクイエム」と言う本の中で見つけた。ストーン宣教師の社会信条に私たちの使命として次のことを言っている…「1. 私たちは

貧困をなくさなければならぬ。2. 人間は富を持ち過ぎるべきでない。貧困も富の持ちすぎも人間に悪い影響を及ぼす。3. ある国の人々は他の国の人々を支配してはいけないと信じる。4. 私たちは平和の為に自分の命を与えなければならぬ。戦争する国は必ず正義の名によって行うけれど、私たちは真の正義を求めて世界が戦争を必要としない日が来る事を待望している。5. 人間の社会は利益追求するよりも奉仕することを土台にすべきだと思う。搾取よりも兄弟愛による社会の出現を待望する。6. 個人の価値を第一に置く社会の出現を期待している。現代の文明は人格を無視し、人間を機械のように見る危険がある。そうである限り信仰を持つことは不可

能である。」最後にストーン宣教師は「キリスト教は強者も弱者も祝福される社会の出現を信じ、すべての人が広大な幸福なる生活への道を辿ることが出来るその社会を建設するために努力する。」という言葉を加え、そして、土との接点を持つことの大切さをこのように表現している「いかなる国家や民族においても、その文化生活の基幹となるものは、しっかりと土に足をつけた農民でなければならぬ」というのが私の信念である。「ストーン宣教師はここで「土に足をつけた農民」の大切さを伝えているが、農民だけではなく、世界中の多くの先住民も土に足をつけて生きてきたことを認識して学ぶことがあると覚えない。九十年前の言葉ではあるけれど、これこそ農村伝道に限らず伝道そのものの方向と中身を示すことばだと思ふ。

神殿の山は、山々の頭として堅く立ち、どの峰よりも高くそびえる。もろもろの民は大河のようにそこに向かい、多くの国々が来て言う。「主の山に登り、ヤコブの神の家に行く。主はわたしたちに道を示される。わたしたちはその道を歩もう」と。主の教えはシオンから、御言葉はエルサレムから出る。主は多くの民の争いを裁き、はるか遠くまでも、強い国々を戒められる。彼らは剣を打ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とす。国は国に向かって剣を上げず、もはや戦うことを学ばない。人はそれぞれ自分のぶどうの木の下、いちじくの木の下に座り、脅かすものは何もないと万軍の主の口が語られた。」このヴィジョンこそストーン宣教師の信条に表れていると思ふ。

私が長年働いた道北センターでは、年に二回三愛精神（神を愛し、人を愛し、土を愛する）に基づいて農業、食糧、と農村社会についての道北三愛塾という研修と交流の会を開いている。道北三愛塾の参加者の一人、北海道余市町で有機農業で野菜と果物を栽培し、農民管弦楽団の指揮者でもある牧野時夫さんの言葉をみなさんに紹介する。自分の農場「えこふあーむ」の目標についてこう言っています。「単に安全で美味しい食品を生産することを目的とするのではなく、すべての生命を尊重して環境を守ることを第一に考えています。経済効率のみを優先して歪んでしまった近代農業に代わり、自給的かつ共生的な社会を作ることを目標にした農場です。」この言葉にも未来に向かうヴィジョンが伝わります。

伝道は自分が被造物であり、この大地の恵みと神様の愛によって生かされていることを覚え、すべての命に価値があることを認識し、この大地を大切にしながら人間が共に生きる道を求めることだと思ふ。それは大地との出会い、また他の人との出会いからはじまることであり、人はありのままの自分を出してお互いに分ち合うことによつてこそ相手と関係を築くことが出来る、その中でイエスキリストの福音によつて与えられている希望を分かち合うこと、そしてペトロの手紙に書いてあるように自分が持っている希望を「穏やかに、敬意をもって」（ペトロの手紙一 3:16）分かち合う姿勢が求められている。農村伝道であろうと都会伝道であろうと、私たちに求められている「伝道」は上の立場から「道を伝える」（正解を

伝える」ということではなく、私たちの命の源である大地を、また相手を大切にしながら共に生きる道を求め、そのヴィジョンを分かち合うことではないでしょうか。

農村伝道神学校の教育によって、七〇年の歴史を参考にしながら神様の新しい世界に向かうことが出来ることを心からお祈りしている。

台湾実習報告

三年 松永明夫

教会生活や文化に興味をお持ちと思われるが、実習ならではの報告をさせて頂きたい。

まず、原住民族と漢族の関係からである。元々、台湾には「原住民族」が居り、見た目や学術的には東南アジアの民族に近いとされている。原住民族と漢民族との関わりは、16世紀のオランダによる統治が始まった頃まで遡るが、戦後蒋介石の中華民国政府（国民党）の横暴（二二八事件）がお互いの更なる軋轢を生む。国民党の原住民族への対応は反発を生んだ。例えば、原住民族の茶畑であるが、漢民族が流通を牛耳っていて原住民族は販売手段を持てずに追い詰められていった。原住民族の中には所有地を漢族へ手放す羽目となった人もいた。漢民

族がその土地を支配し、元々の土地の所有主であった原住民が下働きとなつてしまったのだ。最近では、八八水害（はちはちすいがい）2009年8月6日から8月10日にかけて台湾の中南部および南東部で発生した水害で家屋被害に遭われた方々に建てる「永久住宅」の建設経過においても漢族は原住民族の意向に反することをした。国民党に対する原住民族の反発がいろいろと残っている。玉山神学院の校長先生方や、原住民族牧師が私たちに特に伝えたかったことは、「台湾はそもそも原住民族の国なので、中国（漢民族）との統合が無いように祈って欲しい」ということだった。

続いては、日本の教会も非常に参考となるであろう事例をご紹介します。地方の原住民族教会にいた多くの若者は都会へ出てしまっている。仕事が無いのだ。その状況から抜け出すために、教会が尽力されていた。「産業宣教」と言うのだが、牧師や長老が地域に合った農作物を探し出し、試しに育てた後、教会員への指導をするのだ。地方の活性化は私が見た限りでは行政の役割ではないようだった。例えば、ツォウ族のコーヒー豆や筍などの有機農作物。阿

美族の柑橘類や米などがあつた。種まきから商品出荷までを牧師や長老が引き受ける。牧師はその上牧会も行っていた。驚きと感心と敬意の連続だった。



阿美族の産業宣教について説明を受ける

滞在中は現地の皆さんに大変良くして頂いた。台湾は「接待の文化」だそうだが、素晴らしいもてなしを受けた。訪問教会の長老の方々には食事や宿泊でお世話になった。玉山神学院のご厚意で、昨年農伝に來られたバランスさんと2日間共に行動することができた。バランスさんには色々とお世話になった。ちなみに、バランスさんは高雄、もうお一人のアヌンさんは台中にて伝道師をされている。帰国前日は、玉山神学院の学生で送別会をして下さった。通訳の方々もお世話になった。特にツ

オウ族樂野教会安淑美牧師には助けられた。訪問先の手配などをして下さった玉山の王素玉さん、案内をして下さった学生の陳祥億さんらにもお世話になった。これらの学びを生かすため、皆さんへの恩返しをも含め自分に何が出来るか考えていきたい。そして実習に参加させて頂いたことを感謝致します。



タルク族の教会にて王素玉さん、陳祥億さんらと

三年 山田原野

このような貴重な体験ができましたことを神様に感謝します。

台湾実習のはじめは、台北市や新北市といった都市部の教会を案内されました。8月26日の日曜日には、地区の合同礼拝があつて出席してきました。（教区での合同礼拝だと

イメージしてもらえるとわかりやすいかと思えます。学校の体育館で行われて、300人くらい出席していたそうです。礼拝の中で踊ったりしているのが驚きました。讚美歌もなんだか、ポピュラーミュージックみたいで現代的でした。こういったにぎやかな礼拝は、日本にいるとほぼ経験できません。戸惑いはありましたが良い経験になりました。

次に都市部を離れて、花蓮市にある玉山神学院という台湾の神学校に行きました。神学校の宿泊施設に泊まって、毎日台湾の原住民族の教会を案内されました。原住民族の人たちはほとんどがキリスト教徒なのだそうです。村の人たちみんなが教会に来るから、山の中にあるけれど大きな教会ばかりでした。そして、教会が地域の中心になっていることは、日本との大きな違いでした。

次に玉山神学院を離れて、山岳地帯の教会を案内されました。ここもほとんどの人がキリスト教徒です。この地域は小さな村が山岳地帯の中に点々としてあるので、訪問した教会に泊まって、また次の教会に行くという感じで、一日ごとに移動していきました。台湾実習の中で一番大変な期間でしたが、同時にそれぞれ

の教会の人たちと一番長く過ごせた所でした。帰りの時間を気にせず、くだらない話をしながらも、時々村の課題や信仰の問題をまじめに話しました。

山を離れて今度は南の方に行き、南部の原住民の教会を案内されました。滞在日数は少なかつたですが、ここでは中会の働きを知ることができました。

南部を離れて、もう一度玉山神学院に行きました。教会も案内されましたが、主に神学校で学生と一緒に授業を受けてきました。農伝と同じように色々な人がいて楽しかったです。

最終日には学生たちが送別会を開いてくれ感激しました。

この実習で強く思ったのは、様々な問題があり、その問題に取り組むことは大切であるとはいえ、日本の教会は難しい顔をして、怒ってばかりです！台湾原住民の教会も問題は山積みです。通訳の方を通して少し込み入ったことを聞いてみると、国家との関係、地域間の関係、漢民族との関係、個人と個人の関係など、多くの悩みを抱えていることがわかりました。だけど、みなさん神の愛を信じて朗らかに礼拝し、飲み食いし、語り合っています。キリスト教

とは、欠けがたくさんある私たちだけれど、神に愛されていると信じることで、ではないですか。日本の教会のみなさんも、できる限り朗らかに過ごしましょう。

通訳をしてくださった方々には本当に感謝です。通訳の方々のご尽力なくして学びは深められませんでした。各地、各教会で受け入れてくださったみなさんにも本当に感謝です。ご飯どれもおいしかったですよ。玉山神学院のみなさんにも感謝です。宿泊施設も長く使わせていただき、学生や事務員の方には本当にお世話になりました。この実習のプログラムを計画し、見えないうちで尽力してくださったことが想像できました。おかげで健康に過ごせ、良い学びを行うことができました。



玉山神学院学生主催の送別会にて

農伝デー報告

二年 下園昌彦

今年も十月の第三土曜日に、無事、農伝デーを行うことができました。農伝デーというのは、応援して下さる方がたのお力をお借りして、教職員と学生が力を合わせて行う、オープンキャンパスとバザーがひとつになった催しです。

日頃、多大なるご支援、ご援助賜っている皆様に、少しでも農伝のことを知って頂きたい、すばらしい環境の下で、豊かな秋のひと時を分かち合いたい、との想いで、この十四年続けて参りました。

シオン幼稚園の子ども達がとても楽しみにしているシオンデーというイベントと同じ日に行っているのも、幼稚園の方がたに、神学校を知って頂きたい、地域の方がたにつながりたいという、わたしたちの願いのあらわれです。

新校長にロバート・ウィットマー氏を迎えた今年、農伝創立七〇周年にあたり、いつもにも増して、張り切って準備にあたりました。天気にも恵まれ、大勢の方がたが農伝を訪れて下さいました。

十時半から、礼拝堂で行われた『農村伝道の原点』と題した校長の講演会を皮切り

に、校舎の中では、七〇周年記念の写真展示も開催され、礼拝堂前の広場では、恒例のカレーライスや珈琲・ジュース、フルーツ、お汁粉などに加えて、新商品の五平餅などが売られました。

グリーンズガーデンと名づけられた校舎の中庭にちなんだ販売コーナーでは、構内で採取栽培された植物で作った野草茶やハーブティ、中庭で育てられた観葉植物、ドライフラワーなども販売されました。

もちろん、後援会へお寄せ下さる、何年にも渡り農伝を援けて下さっている方がたの、手作りの梅干しや漬け物、ジャム、ジュースなど、全国各地からの「おいしい援助物資」も沢山あります。

お昼を過ぎた頃からは、シオンデーをたっぷり楽しんだ子ども達の姿も増えてきます。



「農村伝道の原点」講演

七〇年以上の昔、カナダ合同教会に献金して下さった、



全国からの美味しい売り物



神学生・保育科生・東南アジアユースの学生
(現アジア学院の前身) 1960年

農伝の歴史を写真で見る

②

ひとりの方に連なって、七〇年もの長きに渡って、農伝を援け、支えて下さっている方がた。そのお一人お一人のお陰で、日々、この学び舎で学べる恵み。四人の教師と三人の職員、十三人の学生という数は、数としては小さいかもしれませぬ。けれども、ひとり一人は、みんな違う一人ひとりです。それ故、時には互いに理解し合えないようなことも起こります。でも、農村伝道神学校では、一人ひとりが違うことがゆるぎされていません。この、大いなる恵みに気づかされる一日となりました。

—— 2019年度入学案内 ——

◆受験資格

- (1) 日本基督教団に限らずプロテスタント教会に所属し、原則として受洗後1年以上(洗礼式を行わない教派については、それに準ずる)の教会生活をしている者。
- (2) 所属教会が推薦し(可能であれば)、高卒または同等以上の学力を有すると認められる者。

◆修業年限

- 神学基礎コース：2年間(2年間で修了することも可)。
- 基礎コース修了後、神学専門コースに進むことができる。
- 神学専門教職者養成コース：2年間
- 神学専門信徒宣教師養成コース：1年間または2年間

◆学費

- 入学金 60,000円(入学時のみ)
- 授業料 240,000円(年額)
- 設備費 30,000円(入学時のみ)

◆受験手続

次の書類を期日までに郵送または持参する。

- (1) 入学願書(本校指定の書式)
- (2) 履歴書(本校指定の書式)
- (3) 教会(牧師または役員会)の推薦書(可能であれば)
- (4) 最終学校卒業証明書(または卒業見込み証明書)
- (5) 受験料 10,000円(振り込み)

◆入学願書受付

- 第1回 2018年10月9日(火)～11月9日(金)
- 第2回 2019年1月8日(火)～2月8日(金)

◆入学試験日時

- 第1回 2018年11月20日(火) 午前9時～午後3時
- 第2回 2019年2月19日(火) 午前9時～午後3時

◆会場 本校教室

◆入学試験科目 (1) 小論文 (2) 旧約聖書・新約聖書 (3) 面接

◎入学願書一式、過去の試験問題集は、本校事務室まで請求ください(無料)。



玉山神学院交換交流 2004年
(2000年から交流が続いている)



初代ストーン記念館 1958年



2017年ストーン宣教師の妻ジーンさんを記念して"Jean's Garden"が出来ました。



現在のストーン記念館 2007年

一〇月二〇日(土) 農伝デー・オープンキャンパス

講演会「農伝七〇周年 農村伝道の原点」ロバート・ウイットマー校長(礼拝堂にて)

城西教会、池袋西教会、西仙台教会、大泉教会、鶴川教会、三鷹教会、大岡教会、鶴川北教会、大宮共立教会、まぶね教会、なか伝道所、守谷伝道所、小諸教会、池袋西教会、西仙台教会、大泉教会、鶴川教会、三鷹教会、城西教会、

一〇月七日 校長は小田原教会の神学校日礼拝でメッセージと講演

神学校日礼拝には、下記の教会に学生を派遣した。

三・二教会、高座渋谷教会、埼玉和光教会、川和教会、横浜港南台教会、翠ヶ丘教会、上大岡教会、鶴川北教会、大宮共立教会、まぶね教会、なか伝道所、守谷伝道所、小諸教会、池袋西教会、西仙台教会、大泉教会、鶴川教会、三鷹教会、城西教会、

お知らせ

- 11月20日(火) 今年度第一回入学試験
- 12月7日(金) 待降節礼拝
- 12月10日(月) 15日(土) 特別講義「禅キリスト教「接心」講師・佐藤研氏
- 詳細は事務室までお問い合わせください。
- 1月8日(火) 2月8日(金) 第二回入学願書受付
- 1月31日(木) 農村伝道シンポジウム
- 2月12日(火) 15日(金) 集中講義「解放講座D」講師 島しづこ氏
- 2月19日(火) 今年度第二回入学試験
- 3月6日(水) 第69回卒業式

農村伝道神学校
〒195-0063 東京都町田市野津田町 2024
Tel 042-735-5775 Fax 042-735-5711
Eメール: noden@pony.ocn.ne.jp
ホームページ: http://www.noden.server-shared.com
振替番号
農村伝道神学校 00160-6-18485
農村伝道神学校後援会 00120-6-24418